

キープ・ディスプレイス

大塚喜子

老人保健施設「朝日苑」五階のエレベーターの前で、車椅子の浅田タミが半べそをかきながら、シミの浮き出た手の甲で目を拭っている。自分を東館から、この西館に連れてきた男と話をしたいのだ。男を玄関で見送りたいのだ。

私は事務所を出て、タミさんの肩に手をかけ「また来てくれるわよ」というと、タミさんは嬉しそうに頷いて、車椅子を器用に回転させながら長い廊下を行きつ、戻りつしている。半べそをかいたのを忘れたようだ。タミさんから、小春日和の紅葉や木々の枝ぶりは見えない。高窓越しに見えるのは、形を変えながら、流れる雲だけだ。

タミさんを連れてきた男がエレベーターを降りて中庭を抜け、正門を出ていくのを高窓越しに見送った。髪をかきあげながら、振り向いて、こちらを見上げたその顔は、神社の境内で偶さか出会う男に似ている。あの男ではないか？ 私が（役所さん）と呼ぶあの男に似ている。

三年前、通勤途中の昼下りに神社に立ち寄った。境内で目を凝らし、銀杏の粒を見つけては、屈んで手元の茶封筒に入れた。そんな私を見ている男がいることに気づかなかった。腰を伸ばして空を見上げると、

「これ持っていきなよ」私が拾い集めたのと同じ位、もしかしたら、それ以上の銀杏が入ったポリ袋がスツと差し出され、驚く間もなく受け取った。

男と出会った瞬間だった。

「随分熱心に拾ってるネ。」メガネの奥の目がいたずらっぽく笑った。

「そんなにたくさん拾ってどうするの、商売でもするの？」

「はい、高く売りつけるんです」ふざけて答えた。

「そりゃいいね、僕にも分け前くれる？」男はおどけて手を差し出した。初対面なのに二人は声をたてて笑いあった。

たっぷりの銀杏を手提げ袋に仕舞いながら礼を言うと、男は照れくさそうにそっぽを向いた。その仕草が不良ぽかった。

神社の石段を二人で一緒に降りて、私は職場に行くためにバス停に向かった。バスが来て、振り返ると、男は同じ姿勢で私を見送っていた。

以降、神社の隣のアパートに住むこの貧乏絵描きと、ほんの偶にだが、境内で顔を合わせるようになった。

中年男と、中年女の縁の始まりだった。

鳥居の影がかかる急な石段を男がゆっくり登っていく。私も歩調を合わせた。途中で男は立ち止まり、空を見上げた。私も真似て空を仰いだ。遠くに薄雲は見えるも、青く透明な空だ。真下に幹線が走っていると思えない静けさだ。

「荷物一つ持とうか？」

男は振り返って手を伸ばした。遠慮して躊躇ったが、着替えを入れた紙の手提げ袋を預けた。登り切ると、参道の両脇に飴屋と甘酒屋と唐辛子売りの屋台が並んでいて、売り手は手持無沙汰の様相だ。正月の賑わいが終わり、参拝する人はまばらで、辺りに気だるい時間が流れている。男はのっそり、社殿に入ると、中を廻って出てきた。

「お参りしないの？」

「ああ」

私は財布から十円玉を取り出して、社殿に入って、何を祈るでなし、願うでもなく、頭を下げて、かたじけなりの参拝をした。

男は境内のはずれのベンチに腰掛けて私を待っていた。色が剥げて、隅っこに釘が出ていたベンチは、修理されてペンキが塗られ、ピカピカになっている。

時折吹き抜ける風が、散りそびれた枯葉を揺らし、銀杏を落としてくれた堂々のイチョウの高木は、空に向けて凜と枝を伸ばしている。

「あれから三年経つわ。秋晴れの日だったわね」

「うん、あの木の下で君は夢中になって、銀杏を拾っていたね」

「役所さん：今年の本名教えてね」

「ああ、仕事がうまくいったらな」男は腕組みを解いて私の顔を覗きながら

「ちよつとだけ良いニュースがある。俺の作品、予選を通過したヨ。暮れに連絡が入った。ここまでは何度も経験したから、あまり喜ばないことにしているんだ」

今度こそ、今年こそは入賞したいと力を注いでいる油絵の公募展の事だ。太い眉が上下に動いて、淡々と話すわりには得意そうだ。

「もう一度おまいりしてくるワ。賞がとれますようにっ！」私は立ち上がった。五百円硬貨を握った。隣に立つ若者が長い間熱心に手を合わせているのに倣って、ゆっくりと社殿に二度頭を下げて、男の元へ戻った。公募展で賞をとつ

たら、新聞に名前が載ったら、専門誌に自分の絵が取り上げられるようになったら、そうなったら俺の名前を教える：と言ったきり、男は名前を教えてくれない。それほど大層な事なのかと頑な男に呆れていた。俳優の役所広司に似ていることから、私は男を密かに（お役所さん）と呼んでいる。

去年、作品が出品されている展覧会に誘われたのに、時間のやりくりがつかなくて、名前を知るチャンスを失ってしまった。

二人は取留めのない話はするが、立ち入ったことは話さないし、聞きもしない。問わず語りのうちに互いを知り得る程度だ。

男は美術大学を卒業してそのまま公立中学校の絵画教師になった。日をおかずして（自分は教師には不向きだ）と気づいたが、親に打ち明けなかった。息子が教師になったのを喜んでいる両親をガツカリさせたくなかったのだ。結局、五年後に退職した。その直後に父親を交通事故で亡くし、母と二人だけになった。

以降はカルチャーセンターで絵を教えたり、環境を変えたくて自衛隊に入隊してみたり：問わず語りに「未だに母親に心配させる、親不孝者サ」と自嘲気味に語った。

私は公務員の夫の酒癖に我慢できなくて三十九歳の時に離婚した。十年間の結婚生活だったと話した。

「嬉しいね。俺の事なんか心配して、お参りしてくれてサ」

ピカピカのベンチが冷たい。身体が冷えてくる。男は座ったままで、立ち上がる気配がない。私も寒さに耐え、かじかむ手をコートポケットに入れたまま座っている。冷たいベンチに我慢して、座っているのは、この男に惹かれていたためだろう。寒くはあっても、それが少しも嫌でないのだから。

二人の足元に数羽いた雀が突然、一斉に飛び立った。中の一羽が甲高く鳴いた。

「さて、俺たちも立つか」男はおもむろに腰を上げた。何時の頃からか、男は時々（俺たち）という言葉を使うようになっていた。私は其れを聞くと、わけもなく面映ゆかった。

バス道りと反対側のシャリンバイや、ヒイラギ南天の常緑が薄日の中で映えている坂道を二人で並んで降りた。少し遠回りになるが、別れるときはこの道と決めている。

坂道が大きく曲がるところで男は立ち止まり振り向いて、私を引き寄せた。

紙袋が静寂を破り、鈍い音を立てて地面に落ちた。始めは額に、其れから首筋にそして唇に、緩やかな口づけは冷たい風の中でゆっくり続いた。私は力が抜けた身体を男の腕に預けた。

全く予期しないことだったというわけでもない……。どこかで予感していた気がする。だから抱き寄せられたときに、怯えずに、素直に男の腕に身を預けたのだろう。

手提げ袋が拾われると恥ずかしさがこみ上げて、人が通りはしまいかと慌てて辺りを見回した。坂道を下りきると、激しい車の往来でたちまち私達は喧騒に包まれた。学生街のこの通りを、楽器やスポーツ用具を抱えた若者が道幅いっぱい広がって駅に向かって行く。四時半の夜勤のタイムカードを押すまでに十分な時間があるが、私はバス停に急ごうとした。

「カレーでも食おう。まだ時間はあるし」男は目の前のカレー屋の看板の前で足を止めた。

「昼飯を喰いそこなったんだ。腹ペコなんだ」

男は大盛のカツカレーを、私は野菜カレーを注文した。男は福神漬けをカツの上に乗せ、大口で一気に食べ、水を何杯もお替りした。よほどお腹がすいていたと見える。

二人での初めての食事だった。男が左利きだと知って、絵筆を持つ男の姿を想像した。

「近いうちにゆっくり食事をしたいな…」と男は呟いたが、私は返事をしなかった。男との距離は今のままでいいと思っている。

夜勤明けの十時すぎ、朝日苑正門前でバスを待っていると、男が息を弾ませて駆け寄ってきて、私の腕を掴んだ。

「まずいわ」

「構うもんか」

「やっぱり、まずいわヨ」

「だって、勤務終えてこれから帰るんだろ」

「勝手な人ネ」

「俺、受賞したよ。それも、【特別大賞】だよ」

「ウワ～おめでとう。おめでとう！」

男は名前を覚えてくれる約束を覚えていた。

「俺の名前、浅田二郎っていうんだ。明日の夕刊に載るはずだ。国内最大規模の公募展での【特別大賞】だよ。本当だよ」

「おめでとう。浅田さん」役所さんは、否浅田さんは唇をキュツと結んだまま、目がはち切れそうに輝いている。

バスが来た。二人は後部座席に席を取り、私は浅田さんの話に耳を傾けた。バスを降りて神社の境内に入った。名ばかりだが、立春が過ぎて、目を凝らせば木々の枝先に春の兆しが見て取れる。二カ月前、正月明けの神社で語らって以来だ。

西館から移動してきた浅田タミさんに付き添っていたのはヤツパリ役所さんだったのだ。

「それにしても驚いたわ。役所さんが浅田タミさんの息子だとわ」

「僕の方こそ驚いてるよ。母が君に世話になるようになって」

「私が朝日苑の職員だと何時頃知ったの？」

「母が西館に移った日に、事務室の奥にいた君を見て、あゝ：ヤツパリと思っ
たね」

「やっぱり？」

「それ以前にも東館の中庭から見かけた君らしい人と、银杏拾いをしていた君がダブって見えたんだ。お互いに身の上話なんて、しなかったね。特に君はガードがチョウ堅いんだから〜」

「大矢ひろ子さん。これから、そう呼んでいいかい」と言いながら浅田さんは立ち上がり、少し歩こうかといいながら空を仰いだ

「いいわよ」と答えたが、話を続けたくて私は立ち上がらなかった。

「私も一人で暮らしているのヨ」

「一人ぼっちじゃないんだろ？」

「兄一家がいるわ。甥や姪がいるけど両親はいないの。だから一人ぼっちよ」

「僕には母がいるけど、母が死んだら身内はいなくなる。そうなると、僕は一人ぼっちになって寂しくなるだろうな…」

「浅田さんには絵があるわ」

「君にだって立派な仕事があるじゃないか」私は答えなかった。

早番、五日に一度廻って来る遅番と、日々目まぐるしく働き、夜勤明けは、眠ることだけを考えてアパートに帰る。疲れた身体は余計なことは考える暇を与えない。夫だった人の酒臭や、蹴りあげられる怯えや、グローブのような拳で殴られる恐れも、この頃は滅多に思い出さない。

公務員で、平時は温厚ですらあるのに、酒を浴びた時の夫は手がつけられなかった。そんな夫に怒鳴り返しもせず、食らいつきもせず、愚痴もこぼさずに只々耐えている自分が嫌だった。離れたい、逃れたいと思うだけで何時までも行動に移せない自分が惨めだった。

例え半殺しの目に合おうとも（夫から離れる）と決心するまでに七年かかった。郷里の出雲から兄が上京して相談に乗ってくれて、私は介護施設に就職した。四十歳になろうとする女が、何の資格も経験も縁故もない私が、何はともあれ、自活できるようになった。だからと言ってこの先々の夢や希望までは考えられない。

「浅田さんには絵があるわ。其れも世間に遺る作品があるわ」

「それはそうかもしれないが」

「いつだったか、考えて、考え抜いて筆を執るって言ったことがあったわね」

「全ての作品がそうではないけどね」

私はあの時、浅田さんのそんな生き方がとても羨ましいと思ったワ

私の日常に（考え抜く）なんていうことはないもの」

「僕は先々の事を考えない：と決めたんだ。自分の描いた絵を世間がどう評価してくれるか期待しないと決めたんだ。絵は僕にとって唯一の大切なものだが、ひとたび僕の手を離れば、誰に、どこで、どう評価されるか判らない。

売れる絵が描けるようになったのは：五年前に母が認知症になってからだね。母が朝日苑に入所してからだね。

偶さか絵が売れても、定職がないから、収入は知れている。僕は納得しているが、そんな僕を母は心底心配していたナ。その母が半年ほどの間に何もかも判らなくなつて、認知症と診断されたんだ。僕は慌てた一方で、母をこれ以上心配させずに済む、母の嘆きをこれ以上聞かされずにもすむ：と思うとホッとした」

「浅田さんは世間の評価を期待してたんじゃないの？世間や母親の期待に応えようとしてきたんじゃないの？」

「以前はそうだったが、今は違うね。世間に認められたいけれど、母親の期待にも答えたいけど、世間に認められなくても、母親の期待に応えられなくても悩まないことにした。サラッと受け流すことにした。そう思うようになってからだね、僕の絵が少し上向いてきたのは」

私は浅田次郎の言葉を反芻しながらも、やはり反発した。

「とにかく浅田さんには絵が遺るわ。私は疲れるだけで、何も残らないワ」

「其れは違うと思うよ」

「違わないわ。厳然たる事実よ」

「君って、頑固なんだね」

浅田はポケットから銀杏を二粒取り出して指先でまさぐりながら、

「ひろ子さんと呼ぶのを止めて、ガンコさんと呼ぼうかな。大矢ガンコさん！
私は肩をすぼめた。浅田さんが笑って、私もつられて笑った

浅田さんの「サラッといこうよ！」の話はいい話だった。初心を忘れていた
ことに気がついて、素直な気持ちになれた。

夫から逃れられさえしたら良し…と起こした行動だったではないか。現に自
分はこのように夫から逃れることができ、自活しているではないか。

「私は何も悩むことはないのね…」

「あれ、ガンコさんが素直になった」と浅田さんは私をからかった。

「何処かで飯を食おうよ」カレーを食った時も同じことを言っていたが、今度
も私は返事をしなかった。自分の性格や、記憶はサラッとは変えられないだろ
う。男との距離はこのままにしておきたかった。神社で偶さか会えればそれで
いいと思った。

浅田二郎は、石段下まで降りて、私が乗ったバスが発車するのを見送って
くれた。

三年前の出会いの時のように。

終わり